

2014年1月16日 全4頁

# これからは純輸出も GDP の押し上げ要因に

## 現れ始めたシェール革命の好影響

ニューヨークリサーチセンター  
エコノミスト 笠原 滝平  
シニアエコノミスト 土屋 貴裕

### [要約]

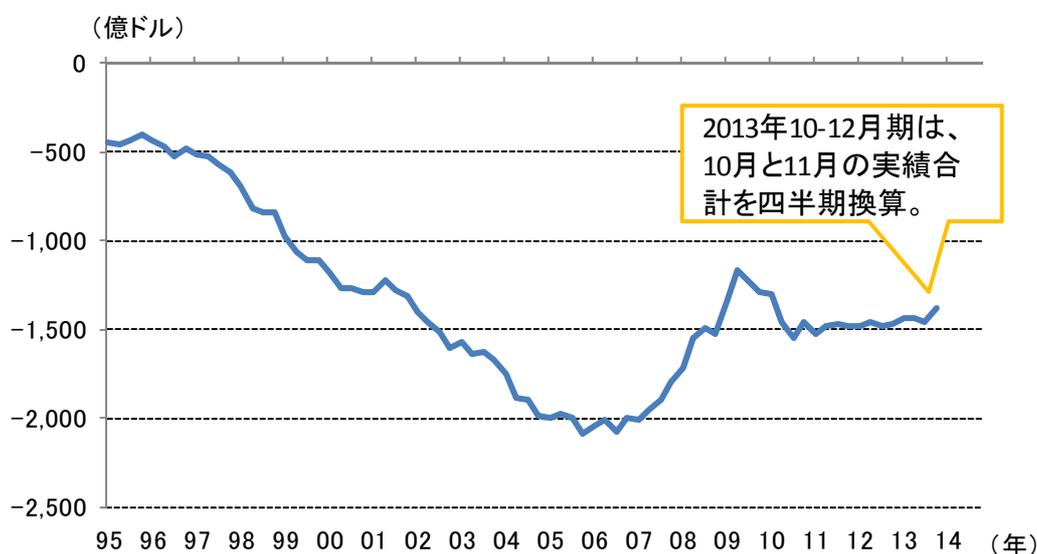
- 2013年10-12月期の実質GDP成長率は、コンセンサス予想よりも上振れする可能性がある。理由として、貿易赤字の縮小が挙げられる。
- 輸出は海外経済の回復によって拡大し、輸入も国内の成長により拡大したものの、石油輸入の減少が輸入全体の増加を抑え、貿易収支の赤字幅は縮小した。シェール革命の恩恵が現れ始めたと言えるだろう。
- エネルギー関連の輸入減少圧力は当面続くと予想され、今後は純輸出がGDPの押し上げ要因になるか、少なくとも足を引っ張る要因としては小さくなっていくことが予想される。

## 2013 年 10-12 月期の実質 GDP と貿易収支

2013 年 10-12 月期の実質 GDP 成長率は、引き続き底堅い個人消費と企業活動が活発化することで、連邦政府機関の一部閉鎖にもかかわらず落ち込むことはないとみられている。Blue Chip (2014 年 1 月号) によるコンセンサス予想では前期比年率 2.4% 成長だが、さらに上振れする可能性がある。その要因として貿易赤字の縮小が挙げられる。

実質ベースでの財の貿易収支は、2013 年 10 月と 11 月でそれぞれ前月から赤字幅が縮小した。10 月と 11 月の実績合計を四半期換算して 7-9 月期と比較すると、実質輸出が前期差 112 億ドル増、実質輸入が同 24 億ドル増となり、12 月が 10 月と 11 月の平均値となる前提だが、10-12 月期の貿易収支の赤字幅は同 88 億ドル縮小することになる (図表 1)。

図表 1 実質貿易収支



(注) 季節調整済み実質値。四半期。

(出所) Census, Haver Analytics より大和総研作成

同様に 10 月と 11 月の四半期換算と 7-9 月期を品目別に比べると、実質輸出は食料品や資本財、産業用部品、航空機などの自動車を除く資本財が増加に寄与した。実質値が公表されていない国別の前年比では名目ベースの比較となるが、中国向けや、持ち直しつつある欧州向けの輸出が増加傾向にある。実質輸入は自動車を除く資本財や消費財が増加したものの、産業用部品が減少し、増加幅は輸出に比べて小幅に留まった。特に、輸入の内訳を石油とそれ以外で分けてみると、石油以外の財は前期差 40 億ドル増であったのに対して、石油は同 8 億ドル減であった。

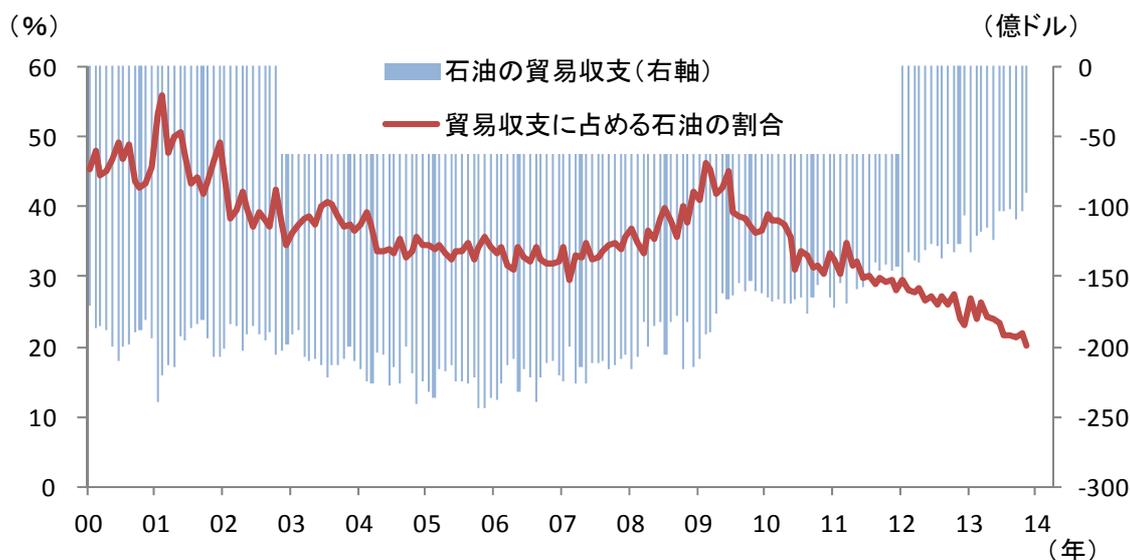
金融危機以降、緩やかながら経済成長が続いてきた米国において貿易収支の赤字幅が縮小したのは、輸出の増加に比べて、石油輸入が減少したことを一因として、輸入の増加幅が抑えられたためと言えるだろう。

## 現れ始めたシェール革命の恩恵

エネルギー関連の輸入が減少してきているのは、技術革新によって、いわゆる「シェール革命」と呼ばれる頁岩（シェール）に含まれていた天然ガスや原油が、相対的に安価に取り出せるようになったためである。米国の実質貿易赤字に占める石油<sup>1</sup>の割合は、2009年頃の50%程度から低下が続き、直近では20%程度となっている（図表2）。国内におけるエネルギー源を石油などから相対的に安価な天然ガスにシフトする動きや、国内における原油の採掘量の増加により、エネルギー関連の輸入需要が低下したと考えられる。

天然ガスなどを含む燃料の貿易動向（名目）においても、輸入は減少傾向、輸出は増加傾向で、燃料の貿易赤字は縮小が続いている。EIA（米エネルギー情報局）の2013年見通しによれば、現在はLNG（液化天然ガス）の純輸入国である米国は、輸出の増加、輸入の減少によって、2016年までに純輸出国になる可能性が指摘されている<sup>2</sup>。引き続き米国におけるエネルギーの輸入需要は低下し、エネルギーの貿易赤字額は縮小が続くことになるだろう。

図表2 石油の貿易赤字は減少へ



(注) 季節調整済み実質値。月次。

(出所) Census, Haver Analytics より大和総研作成

## 輸入が GDP の押し下げ要因としては小さくなる

今後のエネルギー輸出は、FTA 締結国向けをはじめ、日本など一部の非 FTA 締結国向けのシェールガスの輸出が認可されつつあるが、輸出に向けた施設などの整備はなおも途上であって、ただちにエネルギー輸出が急増する状況にはない。一方で、EIA の短期見通しによると、原油や

<sup>1</sup> 実質値でデータが公表されているエネルギー関連の貿易動向として、石油のデータを使用する。

<sup>2</sup> <http://www.eia.gov/forecasts/archive/aeo13/index.cfm>

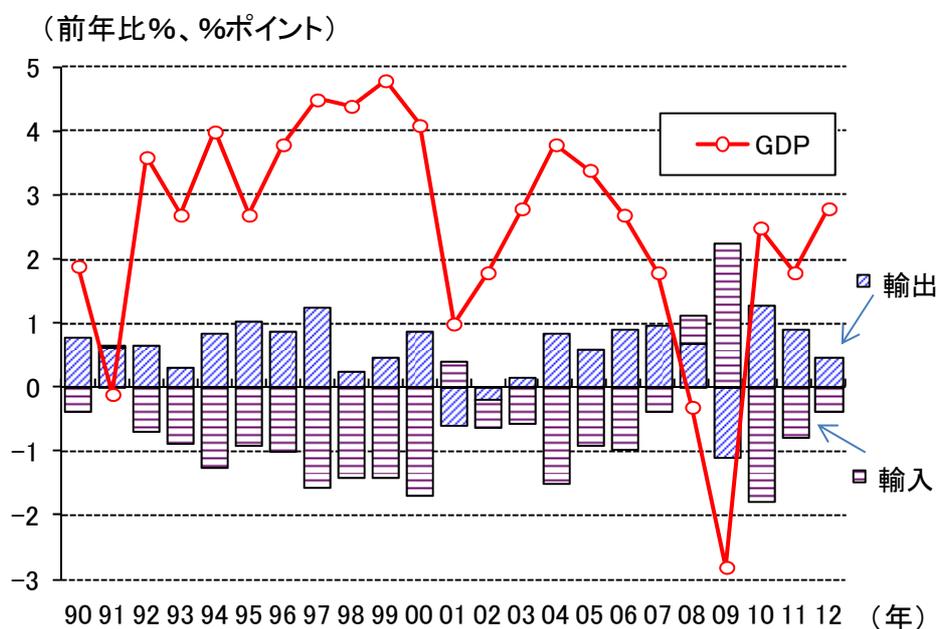
天然ガスの生産拡大は続く見込みで<sup>3</sup>、エネルギー関連の輸入減少圧力は当面続くと予想される。そのため、エネルギー関連の貿易収支は赤字幅の縮小が見込まれる。こうしたエネルギー関連の収支を踏まえて、貿易動向が米国経済へ与える影響はどうか。

世界銀行の2014年の世界経済見通しによれば（2014年1月14日公表）、世界全体の実質GDP成長率を3.2%と2013年6月時点の予想から0.2%ポイント上方修正し<sup>4</sup>、エネルギー関連を含め米国からの輸出拡大が期待されよう。もっとも、世銀はいわゆるQE3（量的緩和第3弾）の縮小に伴って長期金利が急騰した場合には、新興国における投資の減少などが生じるリスクにも言及している。一般に、短期的な輸出動向は海外の需要動向に左右される側面が強く、必ずしも輸出が拡大するとは限らない。

輸入も国内の消費動向などに左右されるが、実質輸入に占める石油の割合は低下傾向にあるとは言え、依然として10%程度にのぼる。シェール革命によって国内のエネルギー生産の拡大が見込まれるため、関連する輸入が減少し、全体の輸入にも減少圧力が続くだろう。

エネルギー生産の拡大とエネルギー輸入の減少に伴い、これまで純輸出はGDPの押し下げ要因であることが多かったが（図表3）、今後はGDPの足を引っ張る要因としては小さくなって、あるいは押し上げ要因になることが予想される。

図表3 実質GDP成長率への輸出、輸入の寄与度（前年比）



（出所）BEA, Haver Analytics より大和総研作成

<sup>3</sup> [http://www.eia.gov/forecasts/steo/report/us\\_oil.cfm](http://www.eia.gov/forecasts/steo/report/us_oil.cfm)

<sup>4</sup> 2010年の実質ドルベースで合算された値。

<http://www.worldbank.org/en/publication/global-economic-prospects>